

社会福祉法人サンライフ／サン・ビジョン

社会貢献事業推進委員会だより

第4号



社会貢献事業について…随想

「子ども食堂のことなど」

理事長 堤 修三

9月初旬の新聞に、「子ども食堂」の名付け親とされる東京都大田区の近藤博子さんが「気まぐれ八百屋だんだん 子ども食堂」を開いてから丸5年を迎えたという記事が載っていた。料金は大人は500円、大学生までは子どもとして「ワンコイン」としているそうだ。はじめ子どもは100円だったが、払わず帰る子の顔が暗いので、1円でもゲームのコインでもいいことにしたら子どもの表情が明るくなったという。近藤さんが言う「貧困対策と見られると、誰でも来づらくなる。子どもも大人も皆が来られる場所になった時、自然と支援が必要な子も来てくれる。」という言葉は福祉のあるべき姿を現しているように思う。法律で制度化されたとか、行政からやってほしいと頼まれたというのではなく、地域の人々が支援の必要な人のために自分たちで考えて取り組む、それもあえて支援と謳うことなく。「福祉」という言葉も居心地が悪そうになるくらい自然な取組だ。

もうひとつは、横浜のドヤ街「寿町」周辺の路上で生活している人々が、路上パトロールをしていた団体の事務所を借りて始めた自分たちの居場所づくりの話だ。彼らは、①酒を飲まない、②タバコを吸わない、③喧嘩をしないという3か条のルールを作り、その居場所の自主管理を始める。はじめは到底無理なことだと思われたが、奇跡が起こる。まず、路上の人たちは（市が配る）パン券で購入した食材を持ち寄って煮炊きを始めた。次いで、どこからかギターを持ってきて弾き始める人が現れ、絵を描き始める人が現れ、ついには書道を始める人が現れたのだ。パトロール活動をしながらお膳立てだけして見守ってきた櫻井さんは言う。「酒を飲まずに、無理なくコミュニケーションを取りながら和やかに時を過ごせる状況が出てきたんです。それも我々が手を出してそう仕向けたのではなく、彼ら自身がそれを作り出していったのです。」

この記事（山田精機「寿町のひとびと」朝日新聞出版『1冊の本』9月号）を読んで、僕は2000年のキューバ映画『バスを待ちながら』（2002年日本公開）のことを思い出していた。そこは、キューバの田舎町にあるバス待合所。続々と人が集まり、なかなか来ないバスを待つ人々で溢れ返っている。来るバスはどれも満席で乗車できず、彼らの希望により、バス停にある壊れたバスの修理が行われるが、出発しようとしたとたんにもまた故障し、バス停の閉鎖が決定。皆は自分たちの手で修理するうちに、自分の話を語り出し、奇妙な連雷管が生まれる。見つけたロブスターを楽しく食べ、食後はダンスに興じる人々。翌日、待合所をペンキで塗り直す作業が始まり、ベッドが置かれ、図書館が作られ、理想郷のような共同生活が始まった。それは人と人とが純粋に繋がり合えるユートピアのように見えたが、すべては主人公が見た夢だったのだ。しかも、ほかの皆も同じような夢を見ていたのである。やがて人々は別れの挨拶をし、幸せそうな表情を浮かべながらそれぞれの目的地へと向かっていく。

人間の社会には、こんな夢のような時間が生まれることがあることを、僕は信じたいと思う。子ども食堂も寿町のサロンも、そんな奇跡のひとつなのだ。社会福祉法人も、そんな**奇跡の時間**を作ることに少しでも貢献できないものか。



社会貢献事業推進委員会活動報告

★第2回コミュニティソーシャルワーカー（CSW）養成研修を実施しました

当法人が実施している「生活困窮者相談支援事業」において、重要な役割を果たすCSWの養成研修を7月24日、8月22日に実施しました。参加した職員は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員等の資格を持つ職員です。

生活困窮に陥ってしまう方は様々な問題を複合的に抱えている場合が多々あります。支援にあたるには、知識や経験、スキルが必要になるため、研修でしっかり学ぶ必要があります。

| プログラム |
|------------------------------------|
| 1日目 |
| 社会福祉法人サンライフ/サン・ビジョン 社会貢献事業について |
| 平成28年度社会貢献事業実績報告 |
| CSW マニュアルの説明 |
| グループワーク 事例2題 |
| 「なぜ障がいを持つ方は生活困窮に陥りやすいのか」講師：治郎丸 慶子氏 |
| 「春日井市の生活困窮者自立相談支援事業」講師：春日井市生活支援課 |
| ・平成28年度実績 |
| ・平成29年度状況 |
| 「春日井エリアの平成28年度生活困窮者相談支援事業を振り返って」 |
| 「生活困窮者世帯の子どもの学習支援について」講師：吉住 隆弘 氏 |
| 2日目 |
| 「地域公益事業と社会福祉事業」講師：堤 理事長 |

参加者の声（研修報告書より抜粋）

- ・もっと地域に貢献できるよう、支援者として最前線にいる我々社会福祉法人の職員が、強い意識をもって取り組んでいく必要があると感じた。
- ・「子ども食堂」の高齢者版「高齢者食堂」があってもおもしろいかなと思った。
- ・十分なサポートが受けられず、日常生活、社会生活において困難を抱えている地域の方を、定められた制度の中でどのように支援をしていったらいいのか、法人職員として一緒に考え、勉強していきたいと思った。



社会貢献事業推進委員会より

今回のCSW養成研修で12名のCSWが誕生しました。それぞれが法人内で担う業務がある傍ら、CSWとして生活困窮者支援にあたることは難しい面もありますが、「奇跡の時間」を作ることに少しでも貢献できればと思います。